濃尾探当照

その二十九

濃尾はナガラ（海人国）

在野一生

本連載は、東南アジア古代史をベースに置きつつ、濃尾地域に展開する古神社や遺跡の分布に重点を置いて、伝説・伝承などを加味しながら濃尾地域の古代像を探っています。この間、本質的な点においてほとんど語られていない当地域と出雲、そしてその王家（大国主）の系譜として考えられる蘇我氏との関係について触れてきました。

前者について要点を述べれば、尾張国一宮の真清田神社（一宮市）や尾張総社国府宮（稲沢市）、そして全国天王総本社島津神社（摂・末社に多くの古社有）、その他星宮神社（名古屋市南区本星崎）などの古神社において、ことごとく出雲の代表神とされているスサノオ神系譜の祭神を祭っていることから、神社的視点に立てば一見して明らかです。

次に後者については、スサノオ長子神のフルネーム神名が、「蘇我」能由夜麻奴斯弥那佐牟留比古夜斯朝斯奴（八束水臣津野命）として記されている（栗鹿大明神元記）がまさに正鵠を射ています。このことから「蘇我」が、須賀（＝須佐）由縁である事がはっきり分かります。

かつて尾張在住の面々で丹後籠神社を正式に参拝した折、海部穀定宮司が直々に出迎えてくださり、いみじくも「尾張は兄弟族」と語って、奥宮他各所を情熱的に案内してくださった事が、私の脳裏に浮かんできます。

尾張屯倉を蘇我氏が管轄する背景

スサノオ夫婦とその子を祭る日本初之宮須我神社の地（雲南市大東町須賀）は、原出雲族が最初の大国主とする須賀之八箇耳命の拠点です。読者の皆さんも「蘇我」が同命や濃尾地域において多く祭られている出雲神スサノオと深縁であるという印象を持たれた事と思います。

ところで、尾張には宣化朝において蘇我稲目が関わった入鹿・間敷両屯倉があったわけで

すが、稲目が統治したのもこのような出雲・蘇我と尾張の神話期頃からの深い関係性の延長線上にあると思えば、ごく自然な成り行きとして理解できるという事を本稿で改めて強調しておきたいと思います。

栗鹿大明神元記に登場する「蘇我」神名が日本書紀などでは通常「清」と表記される事から、清田・清原・清須などという「清」名称も蛇族王須賀之八箇命（↓蘇我氏）との関係性において見つめ直してみたいものです。ちなみに八岐大蛇族の採鉱中心地とされる雲南市大東町清田には西利太神社（祭神金山比古）があります。少々余談になりますが、この八岐大蛇族古代産鉄中心地である「セリタ」は、徳川家が後裔を称する「世良田」氏に通じます。徳川氏の古代祖先を探鉱族と想定すると、御三家が金属資源豊富な紀伊（水銀）、水戸（銅）、尾張（鉄）に配置されたのは偶然とは思えない部分があります。また、家康は忍者を重用しましたが、その衣裳が古代製鉄集団長の村下装束そのものであるという点も興味深いものがあります。

尾張では清須市周辺域に目が止まります。同市西域は特に弥生以降における海洋（蛇）族の展開をイメージできる遺跡や文化財が豊富に存在しています。清洲東インター周囲には最大級の弥生集落跡である海洋色濃厚な朝日遺跡があります。「朝日」が尾張氏祖神天火明命を祭る籠神社祭神豊受大神の別名であり、古代産鉄地によくある名称である点も見逃せません。西隣には尾張連の根拠地ともいわれ「ソガ」の意味を有する「日下」部地区があって、その北には海洋族信仰の象徴ともいうべき磐座（環状列石）がある尾張大国主霊神社（国府宮）があります。

日本神話をみると渡来神スサノオ勢力が中心的蛇族に融合したとみる事もできますが、清須南西の海部郡蟹江町のスサノオ色濃厚な須成天王祭では、砂を採り、多度大社の小石を拾い、葭苅神事が行われます。これは、異なる素材で製鉄する三族が禊をして同族化する儀式のように私の目には映ります。

美濃地方に目を転じると、美濃国一宮南宮大社では先述の西利太神社同様金山彦を祭っています。そして同大社は、出雲系蛇神諏訪神社の中之宮とされているのです。さらに、同国二宮伊富岐神社の祭神も蛇神とされスサノオも祭っています。辺りは南方系製鉄素材である赤鉄鉱と融剤の石灰が豊富です。

濃尾は海人国＝「ナガラ」

このように濃尾一帯は、本質的に原出雲族同様海洋（蛇）族の土地柄です。ところで、南方系製鉄のメッカともいうべき古代インドには「ナーガ（蛇）」族が展開し、いわゆる「錆びない鉄」を製造していました。法隆寺など古代寺院建築に使われた和釘は、この南方系低温製鉄（直接法）の技術的系譜にあると私は考えています。「ナーガ」が蛇の意で、「羅」「良」で表記される「ラ」は通常「国」の意ですから「ナ（ー）ガラ」は即ち「蛇国」の意味になります。濃尾平野の清流長良川、名古屋市中川区や岐阜市そして揖斐川町（三輪神社有）にある「長良」の本質は、南方系海洋性族進出地という点にあります。弥生期以降この川の流域に沿って開拓が進んでいった事がイメージされます。

＊著者プロフィール
在野一生（ありのいっせい）
作家、地方史家。東北アジア史をベースにおいて濃尾平野の古代像を探る。遺跡の存在や分布を重視しつつ、記紀等各種神話、地域伝承、神社由緒、古史古伝なども視野に入れ、民俗学的視点も取り入れて考証するスタイルを取っている。古代産鉄貿易国家である伽耶に強い関心を持つ。